

特定の音楽ジャンルの展示にみる博物館の役割と課題 —台湾屏東市所在・軍歌館の事例を中心に—

井上裕太

國學院大學大学院文学研究科史学専攻
博物館学コース博士課程後期

1. 発表者による音楽博物館の分類と研究目的

音楽資料を展示する博物館は多数あり、発表者はその種類を下記の通り分類する。

楽器博物館…楽器を展示

例：浜松市楽器博物館

武蔵野音楽大学楽器博物館

大阪音楽大学音楽博物館 など

音楽家博物館…音楽家の資料を展示

例：古賀政男音楽博物館

吉田正音楽記念館

星野哲郎記念館 など

民族音楽博物館…民族音楽に関する資料
を展示

例：国立民族学博物館

天理参考館 など

音響博物館…レコード等の音楽媒体や
再生機器を展示

例：レ・コード館

金沢蓄音器館 など

音楽ジャンル博物館…特定の音楽ジャンルに特化した展示

例：わらべ館、シャンソン館、FN 音楽館、**軍歌館** など



「音楽ジャンル博物館」は、特定の嗜好の来館者を集客する効果はあるが、人々が普く理解できる展示を行うのは容易ではない。そこで本発表では、国内外の事例をもとに、「音楽ジャンル博物館」の特徴を明らかにすることを目的とする。特に、2014年12月に屏東県政府文化処が設立した軍歌をテーマとした軍歌館の事例を、現地調査と聞き取り調査をもとに取り上げる。

2. 軍歌館の概要

・屏東の歴史

日本時代は航空部隊の拠点として利用され、日本軍の官舎が置かれた。戦後は日本時代の日本家屋をそのまま利用し国民政府の官舎が置かれ、眷村文化の根付いた軍都として発展。

※眷村…外省人の軍人やその家族の居住する地域のこと。

・文化政策

「勝利眷村文化園区」として、地区の整備・建造物の保存が推進されていたが、現在は保存対象地域が拡大し、「屏東眷村文化園区」として、行政（屏東县政府文化処）主導

により地区全体の整備が進行中である。軍都としての歴史を保存するため、空き家を県が買い取り整備しており、将来的に、地区一帯を県の管理するテーマパークとして整備する構想が進んでいる。

地区内にはかつて陸軍官校校長の官舎だった建物を利用した「将軍之屋」が展示施設として公開され、軍人や眷村に住む家族の日常生活を中心とした展示が行われている。「軍歌館」は将軍之家に続く、第二の文化発信施設として設立され、案内所としての機能を兼ね備えた施設として機能している。建物だけでなく、民族の記憶を保存する意味で、軍歌館が設立された。

・台湾における軍歌の位置付け

台湾では、1949年以降、中国への反撃へむけ、国民の意識統一させる手段として軍歌が利用された。また、兵役により、一般の人々の間に軍歌が身近な存在として定着しており、軍歌は兵役時代を思い出す“懐メロ”としての機能も果たしている。また、軍歌の作詞家・作曲家の作った音楽がアニメの主題歌に使われることもあり、大衆文化に馴染んでいる。



(「軍歌館」リーフレットより転載)

・展示内容

眷村の歴史を語る上では日本統治時代の展示も必要だが、様々な背景が投影されてしまうため、県庁の意向により、現在は来館者が軍歌を懐メロとして楽しめるよう1949年以降（国民党時代）の展示のみを行っている。将来的には、地域の軍歌の歴史を展示するのみならず、全世界の有名な軍歌を収集・保存し、展示や講演会を行うことも検討されている。

・現在の課題

軍歌館では1949年以降の国民政府が持ち込んだ軍歌のみが展示・収集されている。建物の歴史を辿ると同様に、日本時代は日本の軍人が建物に居住していたので、日本の軍歌も保存すべきかという点は、今後方針を決定しなければならない課題であり、軍歌館の展示を通して軍歌が生み出される背景を考えるとともに、今後軍歌が歌われなくなるとを願うような、平和を意識した情報発信を行う必要もある。(2015年2月25日実施の台湾・屏東县政府文化处长・呉錦發氏へのインタビュー映像による。蔡錦佳氏提供。)

また、ハードウェア面では、建物の保存が実施されているが、ソフトウェア面（軍歌）の研究は進んでいない現状がある。地区内では、一過性の情報発信や啓発イベントは多く開催されているが、研究活動は行われていない。そのため、地域と連携して、屏東の歴史を軍事学、軍歌などの音楽学、歴史学、地理学、或いは工学など、多くの学問領域による学際的研究を行い、大学などの研究機関と協力して、研究拠点として機能させることが求められる。屏東は、日本時代、国民党時代の2つの時代の軍人が居住し、2つの時代の軍歌が残されており、その意味においても、研究活動を推進すべきである。一方で、現在はイベントの実施等による観光地化が地区全体で進んでおり、観光スポット

として地区を認知させる活動は行われている。これらを両立させることが肝要である。

3. 我が国における音楽ジャンル博物館

a. わらべ館（鳥取県鳥取市）

- ・鳥取県は童謡作家・岡野貞一、田村虎蔵、永井幸次等の出身地。
- ・運営…公益財団法人鳥取童謡・おもちゃ館（鳥取県・鳥取市が出捐）

→鳥取県とゆかりの深い童謡とおもちゃを中心に展示し、行政が積極的に支援。調査研究事業も実施している。

b. FN音楽館（岐阜県大垣市）

- ・大垣市(旧養老郡上石津町)が作詞家・江口夜詩の出身地であることから、音楽による町おこしを目指し日本昭和音楽村を開設。FN（フォーク・ニューミュージック）とは所縁はないが、音楽による町おこしの一環として行政主導により日本昭和音楽村内に設立。
- ・運営…大垣市

→音楽による町づくりという明確な目的のもと、行政主導により運営。地域とFNとの関連性が希薄。研究活動は行われていない。

c. シャンソン館（群馬県渋川市）

- ・『日本のへそ』と言われる渋川市からシャンソンを発信したいとの意思から、シャンソン歌手・芦野宏が設立。
- ・運営…一般財団法人 羽鳥文化振興財団 日本シャンソン館

→遠方からの来館者多数。しかし、渋川市はシャンソンと直接的な関係がなく、地域とのつながりは希薄。館長は今後の課題として地域とのつながりを挙げている。また、演奏会は頻繁に実施されているが、館として研究は行っていない。

我が国の「音楽ジャンル博物館」では、童謡をテーマにした「わらべ館」（鳥取市所在）、フォーク・ニューミュージックをテーマにした「FN音楽館」（大垣市所在）等、音楽による町づくりを目指し行政が主導的に支援した例が散見される。「シャンソン館」（渋川市所在）のように、地域との関係性が希薄である博物館もあるが、そこでも地域との関係性の強化を課題として掲げており、音楽ジャンルを展示することは、特定の音楽嗜好者を対象とするのみならず、地域に音楽文化を根付かせ、地域のアイデンティティを形成・伝達することも求められることが分かる。また、研究活動が行われている館は「わらべ館」のみであり、研究で得られた情報を発信するという点が課題である。

4. まとめ

特定の音楽嗜好者と地域住民の両者から支持を集めるためには、「ファンの心を捉えること」「地域文化を表出させた魅力ある展示を行うこと」が必要であり、この2点を両立させることが求められる。その意味で、軍歌館では、この2点を両立させており、軍都としての地域の特性を活かし、町づくりの中で軍歌の情報を発信するモデルケースとして特筆すべきである。将来的には、地区全体の眷村文化を保存し、その中の施設として軍歌の歴史

を研究し、情報発信を行うことが必要となる。

また、開館から日が浅いため、今後の動向を確認する必要がある。また、特定の音楽ジャンルを展示する博物館の事例は僅少であるため、今後はそれぞれの事例について詳細を調査し、特徴をより明確化させることが課題である。

最後に、本発表に際して、軍歌館設立準備委員会委員・蔡錦佳氏にご助言・ご協力いただきましたことを、心より感謝申し上げます。

〔参考〕軍歌館設立経緯

2013年9月~10月 台湾国内の眷村文化を保存する施設の現地調査(蔡錦佳氏写真提供)



公園路 321 巷芸術聚落



四四南村 (信義公民会館/元兵工場)



新竹眷村博物館



台中彩虹眷村

2013年10月3~11月 日本の博物館調査

調査実施館：小倉百人一首殿堂 時雨殿、立命館大学 国際平和ミュージアム
河井寛次郎記念館、浜松市楽器博物館、古賀政男音楽博物館
民音音楽博物館、靖国神社遊就館、記念艦「三笠」

2014年12月15日開館 (蔡錦佳氏写真提供)

